精神的健康・幸福度をめぐる新たな二者関係理論とその実証方法

浅野 良輔¹ 浜松医科大学 五十嵐 祐 名古屋大学

“Individual-dyad dynamics”: A new perspective and empirical methods for understanding mental health and well-being

Ryosuke Asano (Hamamatsu University School of Medicine) and Tasuku Igarashi (Nagoya University)

Dyadic relationships play a pivotal role in mental health and well-being. Although individual-level factors such as self-esteem and attachment style have been widely studied, the psychological constructs shared and emerging in dyadic relationships have not been explored adequately. This article introduces a novel approach called “individual-dyad dynamics” for understanding mental health and well-being, and provides an overview of dyadic data analysis methods. The approach examines processes involved in dyadic relationships at both the individual and dyad level. Utilizing the tenets of social cognitive theory and social capital theory, we propose that shared relational efficacy, which refers to two individuals having common efficacy expectations and subjectively experiencing commonality in expectations, is distinguishable from perceived relational efficacy. The article discusses the nature of shared relational efficacy from both theoretical (i.e., self-efficacy and shared reality) and analytical (i.e., multilevel structural equation modeling) perspectives. We summarize past empirical research providing preliminary support for this approach and outline implications and future directions regarding dyadic relationship studies.

Key words: mental health, well-being, dyadic relationships, individual-dyad dynamics, shared relational efficacy.

The Japanese Journal of Psychology

2015, Vol. 86, No. 5, pp. 481–497

J-STAGE Advanced published date: September 15, 2015, doi.org/10.4992/jjpsy.86.14401

社会科学の分野では、個人の心理的適応がどのようにして達成されるのかについて、精神的健康、快楽主義 (hedonism: Kahneman, Diener, & Schwarz, 1999)、幸福主義 (eudaimonism: Ryan & Deci, 2001) の観点から、さまざまな検討がなされている。快楽主義は、人生満足度やポジティブ感情の高さ、ネガティブ感情の低さを重視する立場であり、幸福主義は、人格的成長、人生の意味、自律性などの“よい人生”を重視する立場

である。本論文では、こうした精神的健康や幸福度の規定因として、社会的ネットワーク、とくに二者関係 (ダイアド) を取り上げる。

社会的ネットワークは、個人の精神的健康や幸福度の源泉として、その重要性が繰り返し指摘されてきた。ソーシャル・サポートが精神的健康を維持・増進する一方で (Cohen & Wills, 1985; House, Landis, & Umberson, 1988; 浦, 1992)、社会的排斥や対人ストレスは精神的健康を阻害する (Eisenberger & Cole, 2012; 橋本, 2005; 浦, 2009)。また、年齢、性別、学歴、職業、所得などよりも、社会的ネットワークは幸福度に対して強い影響を与えることが一貫して示されている (Kahneman & Krueger, 2006; 大石, 2009; Ryan & Deci, 2001)。

それでは、個人の精神的健康や幸福度を規定するとされる社会的ネットワーク、とくに二者関係については、これまでどのような検討がなされてきたのだろうか。従来の研究では、個人一人ひとりの“こころ”や

Correspondence concerning this article should be sent to: Ryosuke Asano, Research Center for Child Mental Development, Hamamatsu University School of Medicine, Handayama, Higashi-ku, Hamamatsu 431-3192, Japan (e-mail: asano.r1984@gmail.com)

¹ 本論文の執筆に際して、金政 祐司先生 (追手門学院大学)、相馬 敏彦先生 (広島大学)、清水 裕士先生 (関西学院大学) より、社会心理学的な観点から建設的なご意見を頂戴し、荘島 宏二郎先生 (大学入試センター) より、統計分析に関する貴重なご助言を賜りました。厚く御礼申し上げます。

“あたま”のなかに二者関係の本質が還元され、そうした個人レベルの影響プロセスが精神的健康や幸福度を予測するとの立場がとられてきた。たとえば、ある特性をもつ個人は、その特性をもたない個人よりも、良好な二者関係を築くことで精神的健康や幸福度が高くなる（あるいは低くなる）という説明は、個人一人ひとりの“こころ”や“あたま”に依拠した説明の典型といえる。しかし、二者関係を源泉とした精神的健康や幸福度は、個人レベルの影響プロセスだけで説明できるわけではない。むしろ、どちらの個人にもみられない二者関係そのものの性質もまた、個人の精神的健康や幸福度に影響していると考えるのが妥当だろう。

本論文の目的は、(a) 個人の精神的健康や幸福度の基盤としての二者関係のメカニズムをより精緻にとらえるために、“個人-関係のダイナミクス” (Figure 1) の視座を新たに導入すること、さらに、(b) このアプローチを実証研究の俎上に載せるため、ダイアドデータの分析方法について議論することである。“個人-関係のダイナミクス”の視座では、従来の心理学で検討されてきた個人レベルの影響プロセスに加えて、二者関係における相互依存性によって創発された、ダイアドレベルの影響プロセスにも焦点を当てる。これら二つの影響プロセスは、個人ではなく、ダイアドを分析単位とすることで検討が可能になる。

本論文ではまず、二者関係が個人の精神的健康や幸福度に与える影響にまつわる先行研究を概観し、個人レベルの説明変数のみに注目することの問題点を明らかにする。つぎに、集団や近隣地域に関する研究動向を踏まえ、個人の精神的健康や幸福度を“個人-関係のダイナミクス”の視座から説明するアプローチの一つとして、二者間で共有されたダイアドレベルの効力期待を取り上げる。さらに、二者間で共有された効

力期待を検証するため、ダイアドデータの分析方法について議論する。最後に、本論文のアプローチと関わりの深い実証研究を概観するとともに、将来の研究の方向性を展望する。

二者関係と精神的健康・幸福度

この節では、二者関係が個人の精神的健康や幸福度に与える影響を説明する代表的な理論として、ソシオメーター理論 (sociometer theory) と成人の愛着理論 (adult attachment theory) を取り上げる。ソシオメーター理論があらゆる社会集団を射程としているのに対して、成人の愛着理論は特定の他者との親密な関係に焦点を当てている。こうした相違はあるものの、二つの理論は、所属欲求 (need to belong) や愛着といった進化心理学的な背景から個人の精神的健康や幸福度を説明し、現在の社会・パーソナリティ心理学の領域において多くの知見を積み重ねている。なお本節では、個人レベルの説明変数としての特性自尊心 (trait self-esteem) や愛着スタイル (attachment style) が、二者関係の質、さらには精神的健康や幸福度を規定するという個人レベルの影響プロセスに限定してレビューを行う。

ソシオメーター理論

ソシオメーター理論 (Leary, 2005; Leary & Baumeister, 2000) によると、低い特性自尊心をもつ個人は、社会集団において所属欲求を満たすことができずに、精神的健康や幸福度を低下させやすい。特性自尊心は、他者からの受容-排斥のライフヒストリーによって形成され、時間や状況を通じて安定した自己肯定の感覚である (Leary & Baumeister, 2000)。これは、状況ごとに刻々と変動する感情体験としての状態自尊心 (state self-esteem) とは区別される。特性自尊心の低さは、自分が他者から受容されることはこれからのないだろう、という自己へのネガティブな期待を意味する (Leary, Tambor, Terdal, & Downs, 1995)。特性自尊心の低い個人は、(a) 自分がいつか他者から排斥されるにちがいないと恐れるがゆえに、(b) 自己や他者の欠点にばかり注目し、(c) 不安、敵意、嫉妬といったネガティブ感情を喚起させるため、(d) 実際に他者との関係を悪化させやすい (Leary, 2005; Leary & Baumeister, 2000)。したがって、特性自尊心の低さは、他者からの排斥という最も避けるべき事態を導くことで (Murray, Rose, Holmes, Derrick, Podchaski, Bellavia, & Griffin, 2005)、個人の精神的健康や幸福度を低下させてしまう。

成人の愛着理論

成人の愛着理論 (Bowlby, 1988; Feeney, 2004; Feeney & Collins, 2015) によれば、不安定な愛着スタイルを

Figure 1. 個人の精神的健康や幸福度を“個人-関係のダイナミクス”によって説明する視座

もつ個人は、親密な関係において安全な避難所 (safe haven) と安全基地 (secure base) を確保しにくいと、精神的健康や幸福度が低い傾向にある。とくに、“自分には他者から受容される価値がない”といった自己へのネガティブな期待である関係不安 (attachment-anxiety) は、“他者は自分の要求に応えてくれない”といった他者へのネガティブな期待である親密性回避 (attachment-avoidance) よりも、精神的健康や幸福度に深刻な影響を与えるだろう (Bartholomew & Horowitz, 1991; Simpson & Rholes, 2004 金政訳 2008)。関係不安の高い人々は、(a) 自分が相手から拒絶されるかもしれないという懸念や恐れから、(b) 相手に対して過剰な要求をしたり、自分を受容しているかどうかを執拗に確認したりして、(c) 怒り、嫉妬、焦りといったネガティブ感情を喚起させるため、(d) 実際に他者との関係を悪化させやすい (Mikulincer & Shaver, 2003)。そのため、関係不安の高さは、親密な他者からの望まない拒絶を招き (金政, 2009, 2010)、個人の精神的健康や幸福度を低下させてしまう。

個人レベルのアプローチの成果と限界

このように、ソシオメーター理論および成人の愛着理論において、良好な二者関係は、所属欲求の充足と、安全な避難所や安全基地の確保につながり、個人の精神的健康や幸福度の源泉になると仮定されている。この点については、社会・パーソナリティ心理学の分野で多くの知見が積み重ねられており (Feeney & Collins, 2015; Leary, 2005)、これ以降、本論文では議論の対象としない。

本論文がこれまでの研究を批判的に吟味しようとしているのは、個人の精神的健康や幸福度の源泉となる二者関係の性質が、特性自尊心や愛着スタイルといった個人レベルの説明変数のみに還元されてきた点である。ただし、本論文は、個人レベルのアプローチを採用した先行研究のすべてを批判するものではない。本節で概観した通り、低い特性自尊心や不安定な愛着スタイルをもつ個人は、相手に対する認知や行動を過剰にネガティブな方向にゆがめ、二者関係を悪化させやすい (金政, 2009, 2010; Murray et al., 2005)。こうした個人が、所属欲求の未充足や、安全な避難所と安全基地の不在によって、精神的健康や幸福度を低める可能性は十分に考えられる。

その一方で、これまでの研究は、特性自尊心や愛着スタイルといった個人レベルの説明変数が、個人の精神的健康や幸福度に対して一定の予測力をもつと同時に、その効果はあくまでも限定的であることを示している。特性自尊心に関するレビュー論文では、個人の精神的健康や幸福度との関連は膨大に報告されているが、変数間の因果関係についてはいまだ検討の余地があるとされている (Baumeister, Campbell, Krueger, &

Vohs, 2003)。また、特性自尊心と抑うつとの関連を検討した 77 編の縦断研究に対するメタ分析の結果 (Sowislo & Orth, 2013) は、抑うつの高さが特性自尊心を低くするというよりも、特性自尊心の低さが抑うつを高めるという因果関係の妥当性を示唆しているが、その効果量 ($\beta = .16$) は必ずしも大きいとはいえない。さらに、愛着スタイルの関係不安、ならびに親密性回避と抑うつとの関連を検討した場合も、弱い相関から中程度の相関にとどまることが多い (Rholes, Simpson, Kohn, Wilson, Martin, Tran, & Kashy, 2011; Simpson, Rholes, Campbell, Tran, & Wilson, 2003)。以上のことから、二者関係が個人の精神的健康や幸福度に影響するメカニズムを理解するためには、特性自尊心や愛着スタイルだけでなく、その他の説明変数にも注目する必要があるといえよう。

そこで本論文では、二者関係がどのようにして個人の精神的健康や幸福度の源泉となるのかを明らかにするため、ダイアドレベルの説明変数に焦点を当てる。Lewin (1947) は、夫婦関係を例に、個人間の相互依存性が一人ひとりには還元できない二者関係に特有の性質を創発させるとともに、このような創発された性質が個人の行動傾向や心理プロセスに影響するという、個人レベルとダイアドレベルのダイナミックスについて議論している。Lewin (1947) の主張は、相互依存性理論 (interdependence theory: Kelley & Thibaut, 1978 黒川監訳 1978) としてその後さらに洗練されていったものの、二者関係にまつわる理論や分析の視点には、依然として個人レベルにとどまったままであった。また、Berscheid (1999) は、二者関係の本質を、態度やパーソナリティ特性といった個人の“こころ”、ないしは“あたま”のなかだけに還元することはできないと指摘した。この指摘以降、二者関係研究 (Acitelli, Duck, & West, 2000; Campbell & Rubin, 2012) や対人コミュニケーション研究 (Ickes, Hutchison, & Mashek, 2004) において、ダイアドレベルの影響プロセスに着目した論考が再び盛んになりつつある。しかし、ダイアドレベルの説明変数が個人の精神的健康や幸福度に与える影響に関する実証研究は、いまだほとんどなされていないのが現状である。

ダイアドレベルの説明変数について検討することは、二者関係の特徴や性質を明らかにしようとする研究のみならず、それらが個人の精神的健康や幸福度に与える影響を理解しようとする研究にとっても重要な意味をもつ。Oishi, Kesebir, & Snyder (2009) は、それまでの幸福度に関する心理学的研究が、パーソナリティ特性、社会経済的地位、社会関係の質に対する主観的評価といった個人レベルの現象にばかり焦点を当て、ダイアドレベルの現象には目を向けてこなかったと批判している。上述のように、二者関係は、個人レベルの影響プロセスとダイアドレベルの影響プロセス

から成り立っている (Berscheid, 1999; Lewin, 1947)。そのため、個人レベルの構成概念として位置づけられる精神的健康や幸福度に対して、二者関係が与える影響をより深く理解するためには、個人レベルの影響プロセスだけでなく、ダイアドレベルの影響プロセスにも注目する必要があるだろう。

ただし、これまでの心理学において、ダイアドレベルの影響プロセスがまったく注目されてこなかったわけではない。たとえば、対人魅力研究における類似性-魅力仮説は、二者のどちらか一方だけには還元できない、自己と他者の類似性が、相手に対する自己の好意度を高めることを示している (Byrne & Nelson, 1965)。また、夫婦間での愛着スタイルや神経症傾向の高低の組み合わせが、夫婦関係の質を規定すること (Ben-Ari & Lavee, 2005)、あるいは二者間のパーソナリティ特性の類似性が、恋人や配偶者との感情体験の類似性や関係満足度を高めること (Gonzaga, Campos, & Bradbury, 2007) が明らかとなっている。

さらに、二者関係の文脈でとくに研究が進められている現象として、情動伝染 (emotional contagion) がある。情動伝染とは、発話、表情、姿勢などの模倣や同期が自動的に生じることで、人々が類似した感情状態を経験することを指し、(a) 模倣、(b) フィードバック、(c) 伝染の三つのメカニズムを通じて生起する (Hatfield, Cacioppo, & Rapson, 1993)。発話、表情、姿勢などの模倣は自動的かつ継続的に生じており、そうした模倣からのフィードバックが、個人の感情状態に対して常に影響する。その結果、他者の感情状態は、そのときどきで個人の感情状態に伝染するのである。また、情動伝染は、言語行動よりも非言語行動に基づいており、自動的で非意識的に生じると仮定されている (Barsade, 2002)。二者関係における情動伝染の具体例としては、恋愛カップルや同性のルームメイト・ペアを対象とした 6 ヶ月から 9 ヶ月にわたる縦断研究において、参加者の感情体験が次第に類似していくことが報告されている (Anderson, Keltner, & John, 2003)。しかし、これらの研究は、個人レベルの影響プロセスとダイアドレベルの影響プロセスの区別を目的としておらず、個人の精神的健康や幸福度を規定する二者関係の性質を明らかにするためには、より詳細な議論が必要と考えられる。

以上のように、二者関係が個人の精神的健康や幸福度に影響を与えるメカニズムを明らかにする際に、個人レベルの影響プロセスに加えて、ダイアドレベルの影響プロセスに焦点を当てることは重要な意味をもつ。しかし、実証研究では依然として、ダイアドレベルの説明変数は十分に検討されていない。そこで本論文では、“個人-関係のダイナミックス”の視座を採用し、二者間の相互依存性に基づいた新たな構成概念を提案する。

“個人-関係のダイナミックス”の視座に向けて

個人の精神的健康や幸福度を“個人-関係のダイナミックス”の視座から説明する本論文のアプローチは、集団レベルの影響プロセスを扱う社会認知理論 (social cognitive theory) や社会関係資本論 (social capital theory) との親和性が高い。本節では、これらの理論を概観した後、ダイアドレベルの説明変数として、共有された関係効力性 (shared relational efficacy) に注目し、その特徴や他の概念との違いについて議論する。

社会認知理論

Bandura (1997) の社会認知理論は、効力期待 (efficacy expectations) の観点から、人々が目標を達成したり、高い成果を得たりするプロセスを説明している。効力期待とは、目標達成のために必要な行動を計画・遂行できるという予期を指し、ある行動が目標達成につながるという予期である結果期待 (outcome expectations) とは区別される。とくに、“わたしは目標を実現するために必要な行動をとることができる”といった自己効力感 (self-efficacy) の概念は、心理学以外の領域においても広く関心を集めている (Bandura, 1997, 2001)。

社会認知理論の注目すべき点は、個人レベルの効力期待だけでなく、集団レベルの効力期待、すなわち集合効力性 (collective efficacy) を仮定していることにある。集合効力性とは、“われわれの集団は目標を実現するために協力し合うことができる”といった、集団全体としての行動を協力して計画・遂行できるかどうかに関するメンバー間で共有された効力期待と定義される (Bandura, 1997, 2001)。集合効力性の高さは、個人一人ひとりの自己効力感の総和ではとらえることのできない、メンバー間の相互調整 (coordination) や相互協調 (cooperation) をうながす (Zaccaro, Blair, Peterson, & Znanis, 1995)。集合効力性は、スポーツ、学校、組織、軍隊、政治、地域社会などさまざまな分野で効果を発揮し、メタ分析においても、集団パフォーマンスとの中程度の関連が確認されている (Gully, Incalcaterra, Joshi, & Beaubien, 2002; Stajkovic, Lee, & Nyberg, 2009)。これらの知見から、集団レベルの説明変数である集合効力性の高さは、個人の精神的健康や幸福度に対してポジティブな効果をもつことが考えられる。

なお、集合効力性は、集合心や集団心といった集団錯誤 (group fallacy) を引き起こす概念ではない。社会心理学では、集団全体に“こころ”を仮定した社会現象の説明は論理的矛盾に陥る、との批判が繰り返されている (Allport, 1924; 亀田・村田, 2010)。しかし、集合効力性は、あくまでも個人一人ひとりの行動を基

盤とした相互依存性によって創発された概念であり、集団錯誤にはあたらない (Bandura, 1997, 2001)²。本論文でも、こうした方法論的個人主義の立場から以降の論を進める。

社会関係資本論

社会関係資本は、協調関係に基づく社会的ネットワークと、そこから生み出される互恵性規範や信頼を包含した複合的な概念であり、個人の精神的・身体的健康や幸福度の増進をうながすとされている (Putnam, 2000 柴内訳 2006)。社会関係資本論では、個人がもつネットワークや信頼といった個人レベルの社会関係資本と、集団内のネットワーク構造や共有された互恵性規範といった集団レベルの社会関係資本をそれぞれ区別して扱う。これによって、“社会関係資本に乏しい個人であっても、社会関係資本の豊かな地域社会に住むことで、安心して暮らすことができる” (Putnam, 2000 柴内訳 2006 p. 16)、といった異なるレベルでの交互作用効果を仮定できる。

集団レベルの社会関係資本の一つとして、近隣地域の集合効力性 (neighborhood collective efficacy) が注目されている。近隣地域の集合効力性は、地域住民における相互信頼と、公共財の保持に積極的に関わることができるといった信念を含む住民間で共有された効力期待と定義され、子どもの非行、住民の犯罪行為や抑うつ症状といったさまざまな問題行動を予測する (Sampson, Morenoff, & Gannon-Rowley, 2002; Sampson, Raudenbush, & Earls, 1997)。近隣地域の集合効力性が高い地域では、そうでない地域よりも住民の犯罪被害のリスクが低く (Sampson et al., 1997)、個人の精神的・身体的健康や幸福度も高いこと (Kawachi, Subramanian, & Kim, 2008) が実証されている。

共有された関係効力性

上述のように、社会認知理論や社会関係資本論に基づく研究では、集団レベルの効力期待が、個人の精神的健康や幸福度を予測することが示されてきた。しかし、二者関係がどのようにして個人の精神的健康や幸福度を規定するのかを明らかにするためには、個人レベル、集団レベルいずれとも異なる、ダイアドレベルの効力期待に注目する必要がある。

Simmel (1908 堀・居安訳 1972) によると、個人間の相互作用を含む二者関係は、社会の最小構成単位であり、三者以上で構成される集団とは明確に区別される (Wolff, 1950)。三者以上からなる集団では、多数派に属する集団成員が、個人の行動傾向や心理プロセス

に対して直接的・間接的な影響を与えることが主である。これに対して、二者関係では、個人ともう一人の個人が、相互に直接的な影響を与え合うことになる。また、集団は一人の成員が離脱しても維持されうが、二者関係はどちらか一方の個人が離脱すると崩壊してしまう。集団と二者関係とのこうした本質的な差異は、二者関係における相互作用を、三者以上の集団における相互作用とは別個の現象とみなすことの妥当性を示すものである。本論文でも、ダイアドレベルの効力期待は、個人レベルの効力期待のみならず、集団レベルの効力期待とも区別されるという立場を取る。

近年、こうしたダイアドレベルの効力期待として、共有された関係効力性の概念が提案されている。共有された関係効力性とは、良好な関係の形成・維持のために必要な行動を、自己と相手が協力して計画および遂行できるかどうかについて、二者間で共有された効力期待と定義される (浅野, 2011; 浅野・吉田, 2011)。具体的には、二者関係を形成している両者が、“わたしたち二人は、よい関係を築くために協力し合える”と予期している状態を指す。この定義に基づく、共有された関係効力性の高さは、自己効力感ではとらえきれない二者の相互調整や相互協調をうながすことが予測される。たとえば、共有された関係効力性の高いダイアドは、(a) 個人 A がサポートを提供した場合、個人 B は負債感を抱かずに感謝を示しながらそのサポートを受容し、(b) 葛藤時に個人 A が話し合いなどの建設的な対処方略を選択した場合、個人 B もその話し合いに応じる、といったことが考えられる。共有された関係効力性によるダイアドレベルの影響プロセスは、従来検討されてきた個人レベルの説明変数に起因する影響プロセスとは異なるものであり、共有された関係効力性は、二者双方の総和としての精神的健康や二者双方の総和としての幸福度を規定するだろう。

共有された関係効力性は、二者関係における共有された現実感 (shared reality: Echterhoff, 2014; Echterhoff, Higgins, & Levine, 2009) を基盤に成立すると考えられる。共有された現実感とは、(a) 直接観察可能な行動 (overt behavior) ではなく、周囲の世界に対する認知、感情、評価、態度といった内的状態 (inner state) に他者との共通性や類似性がみられる、(b) 内的状態を共通させるべき特定の対象が存在している、(c) 世界を正しく理解しようとしたり、他者とのつながりを構築・維持しようとしたりする動機づけに基づいている、(d) 他者との間に内的状態の共通性がみられることを意識的に経験している、という四つの要件によって定義される。これらの要件がいずれか一つでも欠けると、共有された現実感は失われる。

共有された現実感に関する上述した四つの要件のうち、(a) 内的状態の共通性と (d) 共通性の意識的経験は、共有された関係効力性の成立に不可欠である

² そのため本論文では、collective efficacy に対する訳語として、集合心や集団心を仮定しているかのように読み取れる“集合効力感”を避けた。

(Figure 2)。内的状態の共通性は、個人 A と個人 B との間で効力期待が実際に共通していることを意味する。これは内的状態にかかわらず、単に個人 A と個人 B の行動パターンが類似している場合とは区別される。また、共通性の意識的経験は、個人 A と個人 B の効力期待の共通性を第三者が外部から推測できるだけでなく、それぞれの個人が二者間の効力期待の共通性を主観的に認識していることを意味する。このように、共有された関係効力性は、二者双方における内的状態の共有を問題としている。これは、共有された現実感が、二者関係のどちらか一方の個人における内的状態の共有を問題としているのとは異なる。

以上のことから、共有された関係効力性は、二者が共通して“わたしたちはよい関係を築くために互いに協力し合える”という効力期待をもつと同時に、二者双方がそのことを意識的に経験することではじめて成

立する。共有された関係効力性は、実体をもつ個人と個人の相互依存性によって創発された構成概念であり、社会心理学者が懸念し続けてきた集団錯誤 (Allport, 1924; 亀田・村田, 2010) をもたらすわけではない。

共有された関係効力性は、集合効力性や近隣地域の集合効力性といった集団レベルの効力期待とは異なる概念である。集合効力性は、比較的小さな集団からマクロな社会集団にいたるまで、さまざまなサイズの集団を含めて定義されている (Bandura, 1997, 2001)。一方で、共有された関係効力性は、二者関係の文脈に焦点を当てて定義されている。また、近隣地域の集合効力性は、住民間の相互作用が少なく、親密性や情緒的絆を基盤としない“弱い紐帯” (Granovetter, 1973) においても、近隣地域がうまく機能し、個人が精神的健康や幸福度を損なわないのはなぜか、といった問題意

Figure 2. 共有された現実感と共有された関係効力性との関連

識を背景に概念化されている (Sampson, Morenoff, & Earls, 1999)。これに対して、共有された関係効力性は、親密な関係という“強い紐帯”における個人の精神的健康や幸福度との関連を元に概念化されている。さらに、石黒・村上 (2007) は、行動や態度の共有に関して、直接的なコミュニケーションが難しい大規模な集団や近隣地域などの“社会システムにおける共有”と、直接的なコミュニケーションが可能な“対人ネットワークにおける共有”の二つを区別している。この分類に当てはめると、一定のサイズをもった大集団における集合効力性、ならびに近隣地域の集合効力性は、社会システムのなかで共有された現実感を基盤としている。これに対して、共有された関係効力性は、二者間での対人コミュニケーションを通じて共有された現実感を基盤としている。これらのことから、共有された関係効力性と、集合効力性や近隣地域の集合効力性は、互いにある程度類似しているものの、完全に一致する概念ではない。

二者関係における効力期待の分類

これまでも、特定の二者関係における効力期待の議論はなされている。たとえば、恋愛関係や夫婦関係 (Doherty, 1981; Fincham, Harold, & Gano-Phillips, 2000; Murray & Holmes, 1997)、スポーツのチームメイト、選手-コーチ関係 (Jackson & Beauchamp, 2010; Jackson, Beauchamp, & Knapp, 2007) における効力期待が検討されてきた。しかし、従来の研究で扱われてきたのは、“わたしは適切に行動することができる”という自己を主体とした個人レベルの効力期待、すなわち自己効力感であった。“個人-関係のダイナミックス”の視座においては、自己効力感によって導かれる個人レベルの影響プロセスだけでなく、共有された関係効力性に基づくダイアドレベルの影響プロセスにも目を向ける必要がある。

二者関係における効力期待を実証的に検討する際には、(a) 効力期待の主体に関する個人レベル-ダイアドレベルと、(b) 分析モデルに関する個人レベル-ダイアドレベルという直交する二軸によって、以下の四つの効力期待を区別することが重要となる (Figure 3)。先行研究では、理論的な観点からみた効力期待の主体と、方法論的な観点からみた分析モデルに不一致がみられたことにより、得られた知見が個人レベルの影響プロセスを反映しているのか、あるいはダイアドレベルの影響プロセスを反映しているのかがあいまいであった。以下に示す四つの分類は、この点を明確に整理するものである。

第一に、“わたしは適切に行動することができる”といったように、自己を主体とする個人レベルの構成概念として理論的に定義され、分析においても個人レベルの影響プロセスが想定されている効力期待は、知

覚された自己効力感 (perceived self-efficacy) を意味している。知覚された自己効力感は、Bandura (1997) の主張に基づいており、特定の二者関係に特化した効力期待として、これまでの研究でもたびたび検討されている (Doherty, 1981; Fincham et al., 2000)。

第二に、個人レベルの構成概念として理論的には定義されているが、実際の分析ではダイアドレベルの影響プロセスが想定されている効力期待は、類似した自己効力感 (similar self-efficacy) を表している。ここでの類似とは、共有された現実感を基盤とせず、社会的ネットワーク研究において想定される“影響”のプロセスのように、関係の親密化に伴って二者の内的状態が似通うことを指す。ただし、この分類は理論的に解釈することが難しく、実証研究で取り上げられることはほとんどない。

第三に、“わたしたちは互いに適切に行動することができる”といったように、二者を主体とするダイアドレベルの構成概念として理論的に定義されながらも、実際の分析では個人レベルの影響プロセスが想定されている効力期待は、知覚された関係効力性 (perceived relational efficacy) を表している。知覚された関係効力性は、共有された関係効力性についての個人一人ひとりの認知として解釈でき、Murray & Holmes (1997) によって検討された効力期待が該当する。

第四に、ダイアドレベルの構成概念として理論的に定義され、分析においてもダイアドレベルの影響プロセスが想定されている効力期待は、共有された関係効力性を意味している。本節で議論してきた通り、共有された関係効力性は、内的状態に二者間で共通性がみられ、そのことを二者双方が意識的に経験している効力期待を指す。“個人-関係のダイナミックス”に基づき、共有された関係効力性を実証的に検討することで、二者双方の精神的健康や二者双方の幸福度を予測

Figure 3. 二者関係における効力期待の分類

することができる。

共有された関係効力性の分析

共有された関係効力性が二者双方の精神的健康や二者双方の幸福度を予測するという、ダイアドレベルの影響プロセスを実証的に検討するためには、通常の回帰分析や構造方程式モデリングなどとは異なる分析手法を用いる必要がある。本節では、ダイアドデータに特化した解析法として、行為者-パートナー相互依存性モデル (Actor-Partner Interdependence Model (APIM): Kenny, Kashy, & Cook, 2006)、ペアワイズ相関分析 (pairwise correlation analysis: Gonzalez & Griffin, 1999; Griffin & Gonzalez, 1995)、共通運命モデル (common fate model: Ledermann & Kenny, 2012) の三つを概観する。その上で、マルチレベル構造方程式モデリング (Multilevel Structural Equation Modeling: 以下 MSEM とする, Muthén, 1994, 1997) という新しい手法を取り上げ、ダイアドデータへの適用可能性について議論する。

ダイアドデータの分析方法

二者関係や集団といったクラスタに個人がネストされている階層データには、同じクラスタ内の個人が互いに独立ではないこと (non-interdependence) により、個人間に類似性がみられるという特徴がある (Figure 4)。そのため、ダイアドデータはサンプルの独立性仮定という統計学における基本的前提から逸脱しており、これを考慮しないまま統計分析を行うと第 1 種の誤りを犯すリスクが高くなる (Kenny et al., 2006; 清水, 2014)。その一方で、こうしたクラスタ内の類似性をうまく利用すれば、ダイアドレベルの影響プロセスを検証することが可能となる。ダイアドデータを分析す

るための方法としては、以下のモデルが提案されている。

APIM は、個人の説明変数が個人自身の結果変数に与える影響である行為者効果 (actor effect) と、個人の説明変数が相手の結果変数に与える影響であるパートナー効果 (partner effect) を検討する方法であり (Figure 5a)、現在最も多く用いられているダイアドデータの解析手法といえる。また、ペアワイズ相関分析は、個人-集団レベル相関分析 (Kenny & La Voie, 1985) の枠組みをダイアドデータに適用し、二者の測定値である観測変数から潜在変数を構成することで、ダイアドレベルを意味する二者間で共有された効果 (shared effect) と、個人レベルを意味する個人独自の効果 (unique effect) を分解し、それぞれのレベルで説明変数と結果変数との間の相関関係を検討する方法である (Figure 5b)。そして、共通運命モデルは、ペアワイズ相関分析を拡張し、共有された効果と個人独自の効果を分解した後、それぞれのレベルで変数間の因果関係、ないしは相関関係を検討する方法である (Figure 5c, 5d)。

しかし、上述した三つの分析手法には、“個人-関係のダイナミックス”の視座に基づき、共有された関係効力性が二者双方の精神的健康や二者双方の幸福度に与える影響を検討するのに不十分な点がある。APIM は、行為者効果とパートナー効果という個人レベルの相互影響プロセスを検討するためのモデルであり (Ledermann & Kenny, 2012)、ダイアドレベルの影響プロセスを扱うことができない。ペアワイズ相関分析や共通運命モデルは、ダイアドレベルと個人レベルの影響プロセスを検討することはできるが、ダイアドデータに特化した手法であるがゆえに、三者以上の集団に

Figure 4. ダイアドデータを例にした階層データの構造

関する知見との比較やそうした研究への一般化が難しい。また、これら三つの分析方法はいずれも、同性友人やルームメイトといった識別不可能な (indistinguishable) データを扱う際に、分析前にデータセットをペアワイズ配列にしたり、推定後に自由度や適合度を調整したりするといったやや煩雑な処理も必要になる (Kenny et al., 2006; 清水, 2014; 豊田, 2009)。そこで本論文では、これらの限界を解決するための手法として、MSEM に焦点を当てる。

マルチレベル構造方程式モデリング

MSEM とは、データ全体の分散共分散行列を Between と呼ばれるクラスタ間 (ダイアドや集団) の分散共分散行列と、Within と呼ばれるクラスタ内 (個人) の分散共分散行列という二つの成分に分解し、それぞれを独立にモデリングする手法である。因子分析

において、複数の項目同士の共通成分 (因子) と各項目の独自成分 (誤差) がそれぞれ抽出されるように、MSEM による分析でも、クラスタ間の共通成分 (Between) とクラスタ内の独自成分 (Within) が切り分けられ、別個のモデルとして推定される (Figure 6)。なお、Between と Within が独立ということは、両者は互いに無相関と仮定されており、Between から Within、もしくは Within から Between という異なるモデルに対してパスを引くことはできない (Muthén, 1994, 1997; 豊田, 2000)。

Between と Within の分解は、全分散におけるクラスタ間の分散の割合である級内相関係数 (intraclass correlation coefficient) に基づいてなされる。級内相関係数の高さは、クラスタ間の差異が大きく、クラスタ内の類似性が高いことを意味する。ダイアドデータの場合、級内相関係数は、個人レベルで測定された変数

a: 行為者-パートナー相互依存性モデル

b: ペアワイズ相関分析

c: 共通運命モデル

d: マルチレベル共通運命モデル

Figure 5. ダイアドデータの分析方法

注) X = 説明変数, Y = 結果変数, A = 個人 A, B = 個人 B。

の得点が二者間で共変動している程度として解釈される。たとえば、二者双方が、“わたしたちはよい関係を築くために互いに協力し合える”という効力期待を共有していれば、知覚された関係効力性の測定値は二者間で共変動する。共有された関係効力性の検討に際しては、級内相関係数を算出することで、知覚された関係効力性の共有が二者間でどのくらい生じているのかを定量的に把握できるのである。

マルチレベル構造方程式モデリングの特徴

これまで、階層データに対しては、マルチレベルモデル (Multilevel Model: 以下 MLM とする, Raudenbush & Bryk, 2002)³ を用いるのが一般的であった。MLM では、個人レベルとして解釈する Level 1 と、ダイアドレベルや集団レベルとして解釈する Level 2 を区別して扱うことができ、多くの点で MSEM と類似した特徴をもつ。しかし、以下の二つの理由から、共有された関係効力性が二者双方の精神的健康や二者双方の幸福度を規定するというダイアドレベルの影響プロセスの検討には、MLM よりも、MSEM を用いるほうがふさわしいと考えられる。

第一に、MSEM を用いることで、Between の説明変数を潜在変数としてみなすことができる (Lüdtke, Marsh, Robitzsch, Trautwein, Asparouhov, & Muthén, 2008)。MSEM では、Between の結果変数と説明変数の両方に対して、クラスタ内の個々人の得点から共通成分を抽出し、潜在的なクラスタ平均を仮定する結果指標集計 (reflective aggregation) が用いられる。この方法は、集団内の雰囲気や風土、共有された期待など、直接観察することの難しい心理学的な構成概念をダイアドレベルや集団レベルで扱う場合に適している。一方、MLM では、Level 2 の説明変数に対して、同じクラスタ内の個人の得点から直接的にクラスタ平均を算出する原因指標集計 (formative aggregation) が用いられる。この方法は、性別、年齢、教育歴、収入といった直接観察しやすい社会的な要因をダイアドレベルや集団レベルで扱う場合には適しているが、心理学的な構成概念の分析には必ずしも適さない。こうした集計法の違いは、潜在変数から観測変数に対してパスを引く因子分析と、観測変数から主成分に対してパスを引く主成分分析の違いに対応している (Figure 7)。したがって、原因指標集計に基づく MLM よりも、結果指標集計に基づく MSEM のほうが、共有された関係効力性の概念との整合性は高いといえる。

第二に、Between の説明変数と結果変数との関連について、MSEM は、MLM よりも正確な推定値を算出することができる (Lüdtke et al., 2008; Marsh, Lüdtke, Robitzsch, Trautwein, Asparouhov, Muthén, & Nagengast,

2009)。MSEM では、あらかじめデータ全体の分散共分散行列を Between と Within に分解した上で、それぞれのモデルを検討する。しかし、MLM では、Level 1 で通常の回帰式を組み立てた後に、その回帰式における切片や傾きが Level 2 ごとに異なるかどうかを検討する。このような原理からなる MLM をダイアドデータに適用した場合、Level 2 の回帰直線は 2 点 (二者) で完全にあてはまるため、誤差を仮定できないという数理的な困難が生じる。そのため、Level 2 のパスはすべてのダイアドを通して等値である、という非現実的な仮定を置かざるを得ない (Kenny et al.,

Figure 6. マルチレベル構造方程式モデリングによる共有された関係効力性と知覚された関係効力性の検討

結果指標集計

原因指標集計

Figure 7. 結果指標集計と原因指標集計

³ 階層線形モデル (hierarchical linear model) と同義である。

2006)。また、Lüdtke et al. (2008) は、(a) 1 クラスタあたりの標本サイズ (number of observations per cluster: 5—30), (b) クラスタの数 (number of clusters: 5—500), (c) 分析に投入される変数の級内相関係数 (.05— .30) を操作したシミュレーションを行っている。その結果、1 クラスタあたりの標本サイズが小さい、クラスタの数が少ない、そして級内相関係数が低い場合に、MLM の Level 2 よりも、MSEM の Between は文脈効果 (contextual effect: クラスタ平均によって構成された変数の回帰係数) のゆがみを抑えることを報告した。この知見は実データによっても確認されている (Marsh et al., 2009)。以上のことから、ダイアドデータを用いて共有された関係効力性を検討する際、MSEM を適用するほうが、MLM を適用するよりも、正確な推定結果を得ることができると考えられる。

ダイアドデータは、1 クラスタあたりの標本サイズが必然的にわずか 2 となる。こうしたデータを扱う二者関係研究者にとって、上述した二つの理由は、MSEM を採用する根拠となりうる。また、社会・パーソナリティ心理学でよく用いられる媒介分析を行う際にも、MLM よりも MSEM が推奨されている (Preacher, Zyphur, & Zhang, 2010)。しかし一方で、MSEM をダイアドデータに適用すると、モデルの性質上、クラスタ信頼性の希薄化が起きやすいという限界もある。クラスタ信頼性は、クラスタ平均が誤差を含まない“真の”得点をどのくらい反映しているのかという指標であり、1 クラスタあたりの標本サイズと級内相関係数によって定義される (Lüdtke et al., 2008; Marsh et al., 2009)。ダイアドデータの場合、分析に投入される変数の級内相関係数が高かったとしても、1 クラスタあたりの標本サイズが小さいために、クラスタ信頼性が極めて低くなり、MSEM によって推定された文脈効果は真の値から乖離しやすい。さらに、これまでの研究では、1 クラスタあたりの標本サイズが 2 という状況における文脈効果のふるまいは直接検討されておらず、ダイアドデータに対して MSEM を用いることの妥当性についてはいまだ十分に明らかとなっていない。したがって現時点では、ダイアドデータに対する MSEM の結果は、慎重に解釈する必要があるといえよう。

以上の議論から、いくつかの限界はあるものの、MSEM によるダイアドデータの分析は、共有された関係効力性に関するダイアドレベルの影響プロセスを実証研究の俎上に載せるための有力な方法の一つと考えられる。

MSEM による分析結果の解釈

ダイアドデータに対して MSEM を適用する際には、当該分野の理論や知見と、分析によって得られる結果との整合性を詳細に吟味することが不可欠である (清

水, 2014)。本論文における主要な説明変数である共有された関係効力性は、理論的にダイアドレベルの構成概念として想定されており、結果指標集計に基づく個々人の知覚された関係効力性の共通成分は、共有された関係効力性の概念的定義と直接的に対応していると考えられる (Lüdtke et al., 2008)。これに対して、結果変数である精神的健康や幸福度については、これまでの理論や知見を踏まえると、個人レベルの構成概念としてとらえるのが妥当である。この場合、結果指標集計によって抽出される個々人の精神的健康や幸福度の共通成分は、あくまでも統計学的な意味での分散の共変動を表しており、理論的な観点からダイアドレベルの構成概念を仮定しているわけではない。MSEM における Between の精神的健康や幸福度は、当該の二者関係の文脈のなかで説明できる精神的健康や幸福度を表しており、これらは“二者双方の総和としての精神的健康の高さ”、あるいは“二者双方の総和としての幸福度の高さ”と解釈すべきだろう。

精神的健康や幸福度を“個人-関係のダイナミックス”によって説明する上で、二者双方の精神的健康や二者双方の幸福度に注目することは重要である。社会的ネットワーク分析を適用した近年の研究では、情動伝染のプロセスを通じて、抑うつや主観的幸福感がネットワーク内で伝播することが示されている (Fowler & Christakis, 2008; Rosenquist, Fowler, & Christakis, 2011)。こうした社会的ネットワークにおける情動伝染と同様に、二者関係においても、情動伝染のプロセスを経ることで、精神的健康や幸福度は個人間で類似すると考えられる。このことは、理論的に個人レベルの構成概念として位置づけられる精神的健康や幸福度が、個人レベルの影響プロセスだけでなく、ダイアドレベルの影響プロセスによっても規定される可能性を示唆している。

このような前提に基づいてダイアドデータを収集し、精神的健康や幸福度の指標に一定の級内相関係数が認められれば、二者双方の精神的健康、あるいは二者双方の幸福度を実証的に扱うことが可能になる。実際に、夫婦・恋愛カップルや同性友人ペアを対象とした調査では、ポジティブ感情やネガティブ感情 (浅野, 2011)、人生満足度や人格の成長 (浅野・吉田, 2013)、主観的幸福感 (石盛・小杉・清水・藤澤・渡邊, 2014) に弱い値から中程度の値の級内相関が報告されている。二者双方の総和としての精神的健康、あるいは幸福度が高いかどうかを取り上げることは、精神的健康や幸福度を二者関係そのものに起因する部分と、そうでない部分に切り分けた上で、それぞれの規定因を明らかにする試みに他ならない。これらは、“個人-関係のダイナミックス”を導入することで、はじめて明らかになる視点といえよう。

以上の議論から、MSEM によるダイアドデータの

分析は、既存の手法とは異なった視点からのモデリングによって概念間の関連を明らかにすることができる。その一方で、MSEM で抽出される Between の解釈については、理論や先行研究の知見を元に、既存の心理構成概念との対応を十分に整理しておくことが重要である。

“個人-関係のダイナミックス”に関する実証研究

本節では、“個人-関係のダイナミックス”の視座に立った先行研究の理論的背景と分析手法を整理した上で、先行研究に与える示唆について論じる。ただし、このアプローチはいまだ萌芽期にあり、本節で取り上げることのできる実証研究は決して多くない上に、必ずしも個人の精神的健康や幸福度を結果変数としたものではない。ダイアドデータを扱う研究では、APIM が一般的に用いられ、ペアワイズ相関分析や共通運命モデルは、その重要性にもかかわらず適用例が非常に限られている (Ledermann & Kenny, 2012)。これは、現在の二者関係研究において、ダイアドレベルの影響プロセスに関する理論や仮説がほとんど提案されていないことの裏づけといえるだろう。さらに、ダイアドデータに対して MSEM を用いた研究も、現在のところ、日本国内でしか行われていない。しかし、それでもなお、二者関係が個人の精神的健康や幸福度に与える影響を今後より一層深く理解するためには、“個人-関係のダイナミックス”の視座に関連する研究を概観することが不可欠と考えられる。

相互作用構造

“個人-関係のダイナミックス”のアプローチは、二者関係における社会的交換をめぐる一連の研究にみられる。清水・大坊 (2007) は、二者関係でなされる社会的交換のパターンを、頻度 (frequency)、多様性 (diversity)、強度 (strength) という三つの要素からなる相互作用構造として定義し、関係良好性との関連をペアワイズ相関分析によって検討した。恋愛カップルに対して質問紙調査を行った結果、ダイアドレベルでは、二者双方の相互作用構造の多様性ならびに強度と、二者双方の関係良好性との間に正の関連がみられた。その一方で、個人レベルでは、本人の相互作用構造の強度と、本人の関係良好性との間にのみ正の関連がみられた。その後、清水・大坊 (2008) は、MSEM を用いてこの結果を再現するとともに、関係良好性に対する相互作用構造の説明率が、個人レベルよりもダイアドレベルにおいて高いことを示した。これらの知見は、個人レベルの影響プロセスよりも、むしろダイアドレベルの影響プロセスによって、親密な関係が成立していることを示唆するものである。

二者に共通した状況・環境要因

“個人-関係のダイナミックス”の視座と関連する研究として、二者を取り巻く状況要因や環境要因に目を向けたものもある。たとえば、夫婦カップルを対象とした質問紙調査のデータに対して、共通運命モデルによる媒介分析を行った研究 (Ledermann, Bodenmann, Rudaz, & Bradbury, 2010) では、ダイアドレベルにおいて、家事の分担や習慣の不一致など関係内で生じたストレスフル・イベントは、直接的に関係の質を低下させることが明らかとなった。また、こうしたストレスフル・イベントは、夫婦間のコミュニケーションの抑制をもたらすことで、間接的に関係の質を低下させることも示された。これは、二者に共通した状況要因としてのストレスフル・イベントが、二者双方の関係の質を規定するというダイアドレベルの影響プロセスを実証した初めての知見といえる。

共有された関係効力性

浅野 (2011) は、集合効力性に関する先行研究 (Bandura, 1997, 2001) に着想を得て、共有された関係効力性が二者双方の感情体験を高めるかどうかというダイアドレベルの影響プロセス、ならびに知覚された関係効力性が本人の感情体験を高めるかどうかという個人レベルの影響プロセスを検討した。恋愛カップルを対象とした質問紙調査のデータに対して MSEM を行った結果、ダイアドレベルでは、関係継続期間を統制してもなお、共有された関係効力性は二者双方のポジティブ感情を高めることが示された。また、個人レベルにおいても、性別を統制してもなお、知覚された関係効力性は本人のポジティブ感情を高めることが示された。この結果は、二者関係が個人の精神的健康や幸福度を規定するメカニズムとして、個人レベルの影響プロセスだけでなく、ダイアドレベルの影響プロセスを重視する本論文のアプローチの有用性を示唆している。

既存の理論への示唆

以上のように、“個人-関係のダイナミックス”の視座をもった実証研究は、いまだ十分とはいえないものの、少しずつ蓄積され始めている。これまでに、(a) 個人レベルよりもダイアドレベルの影響プロセスにおいて、相互作用構造の多様性と強度が関係良好性を高める、(b) ダイアドレベルの影響プロセスにおいて、ストレスフル・イベントは、直接的ないし間接的に関係良好性を低下させる、(c) ダイアドレベルの影響プロセスでは、共有された関係効力性が二者双方のポジティブ感情を高めると同時に、個人レベルの影響プロセスにおいて、知覚された関係効力性は本人のポジティブ感情を高める、といった知見が得られている。

この他にも、二者双方の関係の質について、恋愛カップルのデータに対してペアワイズ相関分析を用いた検討 (Collins & Feeney, 2000) や、夫婦カップルのデータに対して共通運命モデルを用いた検討 (Matthews, Conger, & Wickrama, 1996) もなされている。二者関係が個人の精神的健康や幸福度に与える影響をめぐる今後の研究でも、本論文のアプローチを積極的に採用していくことが望まれる。

“個人-関係のダイナミックス”の視座は、ソシオメーター理論 (Leary & Baumeister, 2000) や成人の愛着理論 (Mikulincer & Shaver, 2003) といった従来の枠組みにも有益な示唆を提供する。ここまでの本論文における議論では、二者関係が個人の精神的健康や幸福度に与える影響を精緻に理解するために、特性自尊心や愛着スタイルなどによる個人レベルの影響プロセスに加えて、共有された関係効力性をはじめ、二者の相互依存性によって創発されるダイアドレベルの影響プロセスに注目することの意義を示してきた。個人の精神的健康や幸福度に対して、ダイアドレベルの説明変数と個人レベルの説明変数は、それぞれ独立した効果をもつことが考えられ、近年の統計解析の発展がこうした新たなモデルの実証的検討を後押ししている。

個人の精神的健康や幸福度を“個人-関係のダイナミックス”によって説明する視座に基づくアプローチは、個人レベルとダイアドレベルの主効果や、二つのレベルの交互作用効果に関する詳細な検討を可能にする。たとえば、“特性自尊心や愛着スタイルにかかわらず、共有された関係効力性の高さは、二者双方の精神的健康や幸福度を増進する”というダイアドレベルの主効果のみならず、“共有された関係効力性の高さは、特性自尊心が低い個人や関係不安が高い個人の精神的健康や幸福度を維持する”といった交互作用効果を検証することもできる。本論文の視座は、個人レベルの影響プロセスを中心とする従来のモデルが見落としてきた点を補い、二者関係がどのようにして個人の精神的健康や幸福度を規定するのかを包括的に理解するための一助となるだろう。

総合考察

本論文の目的は、個人の精神的健康や幸福度を“個人-関係のダイナミックス”によって説明する視座を導入し、そのための方法論として、ダイアドデータの分析手法について検討することであった。まず、これまでの研究において、個人の精神的健康や幸福度の源泉としての二者関係の性質が、主に特性自尊心や愛着スタイルといった個人レベルの影響プロセスに還元されてきたことを明らかにした。つぎに、社会認知理論や社会関係資本論を踏まえ、共有された関係効力性というダイアドレベルの説明変数を取り上げるとともに、その分析手法としてマルチレベル構造方程式モデ

リングに注目した。最後に、本論文のアプローチと関連する実証研究として、相互作用構造、二者を取り巻く状況・環境要因、共有された関係効力性に関する知見を概観した。個人レベルとダイアドレベルの両方の影響プロセスに目を向ける本論文のアプローチは、個人の“こころ”や“あたま”を研究の中心としてきた従来の社会心理学の枠組みを越えて、二者関係が個人の精神的健康や幸福度を規定するメカニズムを、より精緻かつダイナミカルにとらえることを可能にするだろう。

“個人-関係のダイナミックス”の視座に基づくアプローチは、今後の心理学研究のあり方そのものにも一石を投じる。個人と集団、ないしは社会との関係を扱う社会心理学は、集団錯誤や方法論的个人主義の問題を認識しつつも、個人レベルの要因のみを扱う理論や研究デザインを見直すべき時期に来ている (Oishi et al., 2009)。個人の精神的健康や幸福度を予測しようとする今後の研究では、ダイアドレベル、もしくは集団レベルの説明変数を取り入れたパラダイム・シフトが不可欠と考えられる。

また、本論文の視座は、社会心理学やパーソナリティ心理学への示唆だけにとどまらず、より応用実践的な視野をもった家族心理学、教育心理学、健康心理学、臨床心理学、ポジティブ心理学といった諸分野との架け橋になりうるという点でも意義深い。より具体的には、二者関係を対象とした個人の精神的健康や幸福度の維持・増進を目的とした、新しいトレーニングやプログラムの開発につながる可能性を有している。

たとえば、共有された現実感の実験パラダイム (Echterhoff et al., 2009) に基づくと、まず個人 A が話し手となり、聞き手である個人 B の知覚された関係効力性に一致するような発言をすることで、個人 A の知覚された関係効力性もそれに合わせて変化することが予測される。その後、個人 A と B が役割を交代して同様の手続きを行う。これにより、個人 A と B の知覚された関係効力性の共有をうながすことができれば、共有された関係効力性が高まり、二者双方の精神的健康や二者双方の幸福度も促進される可能性がある。このように、個人レベルの影響プロセスとともに、ダイアドレベルの影響プロセスにも注目することは、心理学における人間観を拡張するだけではなく、研究成果を社会に還元するという意味でも大きな意義をもつだろう。

将来の研究に向けた課題と展望としては、大きく以下の3点が挙げられる。第一に、個人の精神的健康や幸福度を“個人-関係のダイナミックス”によって説明するアプローチは、その端緒についたばかりであり、実証的知見の蓄積に乏しい。社会心理学や家族心理学の領域では、ダイアドレベルの影響プロセスを検証するためのさまざまな分析手法が提案されてきた。その

一方で、それらを生かした理論や仮説は、ほとんど提案されていないのが実情である (Ledermann & Kenny, 2012)。Van Lange (2013) は、(a) 真実性 (truth), (b) 抽象性 (abstraction), (c) 発展性 (progress), (d) 応用可能性 (applicability) という四つの観点から社会心理学理論の質を問うべきと主張しており、過去にもこれらを満たさない理論は淘汰されてきたと指摘している。今後は、これら四つの点を考慮しながら実証研究を積み重ねていくことで、本論文で提案されたアプローチの質を高めることが求められる。

第二に、“個人-関係のダイナミックス”に基づいた研究の方法論についても、十分に議論されているとはいえない。本論文で概観した“個人-関係のダイナミックス”に関する実証研究は、いずれも調査法によって測定された認知や知覚を分析対象としたものであった。しかし、行動科学としての社会心理学では、実験法や観察法によって直接観察可能な行動を測定することも重要である (Baumeister, Vohs, & Funder, 2007)。たとえば、共有された現実感や集団間関係に関する実験 (Echterhoff et al., 2009; 岡本・藤原・野波・加藤, 2008) を参考に、会話中の二者の発話内容や非言語行動の変遷をとらえ、これらが共有された関係効力性と二者双方の精神的健康、ならびに二者双方の幸福度との関連を媒介するかどうかについて検討することも必要だろう。

第三に、ダイアドレベルの影響プロセスを重視した本論文のアプローチに、メゾレベルとしての集団や、マクロレベルとしての社会構造といった視点を付与することも重要である。メゾレベルの視点においては、二者関係を取り巻く第三者との社会的ネットワークが、個人の精神的健康や幸福度に影響を与えることが予測される (相馬・山内・浦, 2003)。また、マクロレベルの視点では、国や近隣地域ごとの人口移動を指す居住地の流動性 (residential mobility) をはじめとした社会生態学的環境の違いと、人々の行動傾向や心理プロセスとの関連が明らかにされている (Oishi, 2010, 2014; Yamagishi, Hashimoto, Li, & Schug, 2012)。今後は、ダイアドレベルのみならず、メゾレベルやマクロレベルを包含した“個人-社会のダイナミックス”へとモデルを拡張することで、個人の精神的健康や幸福度をより統合的に理解することが期待される。

社会のなかで生きるわれわれにとって、二者関係は、精神的健康や幸福度の重要な規定因である。“個人-関係のダイナミックス”の視座に基づいて、個人の精神的健康や幸福度の維持・増進に資する知見を社会に提供していくことは、今後の心理学における大きな課題といえるだろう。

文 献

- Acitelli, L. K., Duck, S., & West, L. (2000). Embracing the social in personal relationships and research. In W. Ickes & S. Duck (Eds.), *The social psychology of personal relationships*. Chichester, UK: John Wiley & Sons. pp. 215–227.
- Allport, F. H. (1924). The group fallacy in relation to social science. *American Journal of Sociology*, **29**, 688–706.
- Anderson, C., Keltner, D., & John, O. P. (2003). Emotional convergence between people over time. *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 1054–1068.
- 浅野 良輔 (2011). 恋愛関係における関係効力性が感情体験に及ぼす影響——二者の間主観的な効力期待の導入—— *社会心理学研究*, **27**, 41–46.
- (Asano, R. (2011). Effects of relational efficacy on emotional experiences in romantic relationships: An intersubjective efficacy expectation. *Japanese Journal of Social Psychology*, **27**, 41–46.)
- 浅野 良輔・吉田 俊和 (2011). 関係効力性が二つの愛着機能に及ぼす影響——恋愛関係と友人関係の検討—— *心理学研究*, **82**, 175–182.
- (Asano, R., & Yoshida, T. (2011). Effects of relational efficacy on two attachment functions: Evidence from romantic relationships and same-sex friendships. *Japanese Journal of Psychology*, **82**, 175–182.)
- 浅野 良輔・吉田 俊和 (2013). なぜ対人関係は幸福度の源泉たりえるのか——3 時点の縦断ペアデータによる関係効力性の媒介効果の検討—— *日本グループ・ダイナミックス学会第 60 回大会発表論文集*, 164–165.
- (Asano, R., & Yoshida, T.)
- Bandura, A. (1997). *Self-efficacy: The exercise of control*. NY: Freeman.
- Bandura, A. (2001). Social cognitive theory: An agentic perspective. *Annual Review of Psychology*, **52**, 1–26.
- Barsade, S. G. (2002). The ripple effect: Emotional contagion and its influence on group behavior. *Administrative Science Quarterly*, **47**, 644–675.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226–244.
- Baumeister, R. F., Campbell, J. D., Krueger, J. I., & Vohs, K. D. (2003). Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles? *Psychological Science in the Public Interest*, **4**, 1–44.
- Baumeister, R. F., Vohs, K. D., & Funder, D. C. (2007). Psychology as the science of self-reports and finger movements: Whatever happened to actual behavior? *Perspectives on Psychological Science*, **2**, 396–403.
- Ben-Ari, A., & Lavee, Y. (2005). Dyadic characteristics of individual attributes: Attachment, neuroticism, and their relation to marital quality and closeness. *American Journal of Orthopsychiatry*, **75**, 621–631.
- Berscheid, E. (1999). The greening of relationship science.

- American Psychologist*, **54**, 260–266.
- Bowlby, J. (1988). *A secure base: Parent-child attachment and healthy human development*. New York: Basic Books.
- Byrne, D., & Nelson, D. (1965). Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, **1**, 659–663.
- Campbell, L., & Rubin, H. (2012). Modeling dyadic processes. In L. Campbell, J. La Guardia, J. Olson, & M. Zanna (Eds.), *The science of the couple: The Ontario symposium*. Vol. 12. New York: Psychology Press. pp. 1–15.
- Cohen, S., & Wills, T. A. (1985). Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, **98**, 310–357.
- Collins, N. L., & Feeney, B. C. (2000). A safe haven: An attachment theory perspective on support seeking and caregiving in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 1053–1073.
- Doherty, W. J. (1981). Cognitive processes in intimate conflict: II. Efficacy and learned helplessness. *American Journal of Family Therapy*, **9**, 35–44.
- Echterhoff, G. (2014). Achieving commonality in interpersonal communication: Shared reality and memory processes. *Asian Journal of Social Psychology*, **17**, 104–107.
- Echterhoff, G., Higgins, E. T., & Levine, J. M. (2009). Shared reality: Experiencing commonality with others' inner states about the world. *Perspectives on Psychological Science*, **4**, 496–521.
- Eisenberger, N. I., & Cole, S. W. (2012). Social neuroscience and health: Neurophysiological mechanisms linking social ties with physical health. *Nature Neuroscience*, **15**, 669–674.
- Feeney, B. C. (2004). A secure base: Responsive support of goal strivings and exploration in adult intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**, 631–648.
- Feeney, B. C., & Collins, N. L. (2015). A new look at social support: A theoretical perspective on thriving through relationships. *Personality and Social Psychology Review*, **19**, 113–147.
- Fincham, F. D., Harold, G. T., & Gano-Phillips, S. (2000). The longitudinal association between attributions and marital satisfaction: Direction of effects and role of efficacy expectations. *Journal of Family Psychology*, **14**, 267–285.
- Fowler, J. H., & Christakis, N. A. (2008). Dynamic spread of happiness in a large social network: Longitudinal analysis over 20 years in the Framingham Heart Study. *British Medical Journal*, **337** (a, 2338), 1–9.
- Gonzaga, C. G., Campos, B., & Bradbury, T. (2007). Similarity, convergence, and relationship satisfaction in dating and married couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **93**, 34–48.
- Gonzalez, R., & Griffin, D. (1999). The correlational analysis of dyad-level data in the distinguishable case. *Personal Relationships*, **6**, 449–469.
- Granovetter, M. S. (1973). The strength of weak ties. *American Journal of Sociology*, **78**, 1360–1380.
- Griffin, D., & Gonzalez, R. (1995). Correlational analysis of dyad-level data in the exchangeable case. *Psychological Bulletin*, **118**, 430–439.
- Gully, S. M., Incalcaterra, K. A., Joshi, A., & Beaubien, J. M. (2002). A meta-analysis of team-efficacy, potency, and performance: Interdependence and level of analysis as moderators of observed relationships. *Journal of Applied Psychology*, **87**, 819–832.
- 橋本 剛 (2005). ストレスと対人関係 ナカニシヤ出版 (Hashimoto, T.)
- Hatfield, E., Cacioppo, J. T., & Rapson, R. L. (1993). Emotional contagion. *Current Directions in Psychological Science*, **2**, 96–100.
- House, J. S., Landis, K. R., & Umberson, D. (1988). Social relationships and health. *Science*, **241**, 540–545.
- Ickes, W., Hutchison, J., & Mashek, D. (2004). Closeness as intersubjectivity: Social absorption and social individuation. In D. J. Mashek & A. Aron (Eds.), *Handbook of closeness and intimacy*. Mahwah, NJ: Erlbaum. pp. 357–373.
- 石黒 格・村上 史朗 (2007). 態度と行動の共有が自己卑下的自己呈示に及ぼす効果 社会心理学研究, **23**, 130–139.
- (Ishiguro, I., & Murakami, F. (2007). The effects of shared attitudes and behavior on self-effacement. *Japanese Journal of Social Psychology*, **23**, 130–139.)
- 石盛 真徳・小杉 考司・清水 裕士・藤澤 隆史・渡邊 太 (2014). 家族システムの発達と移行に関する研究——夫婦ペアデータのマルチレベル相関分析—— 日本グループ・ダイナミクス学会第61回大会発表論文集, 196–197.
- (Ishimori, M., Kosugi, K., Shimizu, H., Fujisawa, T., & Watanabe, F.)
- Jackson, B., & Beauchamp, M. R. (2010). Efficacy beliefs in coach-athlete dyads: Prospective relationships using actor-partner interdependence models. *Applied Psychology: An International Review*, **59**, 220–242.
- Jackson, B., Beauchamp, M. R., & Knapp, P. (2007). Relational efficacy beliefs in athlete dyads: An investigation using actor-partner interdependence models. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, **29**, 170–189.
- Kahneman, D., Diener, E., & Schwarz, N. (Eds.) (1999). *Well-being: The foundations of hedonic psychology*. New York: Russell Sage Foundation.
- Kahneman, D., & Krueger, A. B. (2006). Developments in the measurement of subjective well-being. *Journal of Economic Perspectives*, **20**, 3–24.
- 亀田 達也・村田 光二 (2010). 複雑さに挑む社会心理学——適応エージェントとしての人間—— 改訂版 有斐閣 (Kameda, T., & Murata, K.)
- 金政 祐司 (2009). 青年期の母-子ども関係と恋愛関係の共通性の検討——青年期の二つの愛着関係における悲しき予言の自己成就—— 社会心理学研究, **25**, 11–20.

- (Kanemasa, Y. (2009). The commonality between mother-child and romantic dyads in early adults: Tragic self-fulfilling prophecies in two attachment relationships in early adults. *Japanese Journal of Social Psychology*, **25**, 11–20.)
- 金政 祐司 (2010). 中年期の夫婦関係において成人の愛着スタイルが関係内での感情経験ならびに関係への評価に及ぼす影響 パーソナリティ研究, **19**, 134–145.
- (Kanemasa, Y. (2010). Effects of adult attachment styles on emotional experiences in marital relationships and evaluations of the relationships in middle-age couples. *Japanese Journal of Personality*, **19**, 134–145.)
- Kawachi, I., Subramanian, S. V., & Kim, D. (2008). *Social capital and health*. New York: Springer.
- Kelley, H. H., & Thibaut, J. W. (1978). *Interpersonal relations: A theory of interdependence*. New York: John Wiley.
- (ケリー, H. H.・ティボー, J. W. 黒川 正流 (監訳) (1995). 対人関係論 誠信書房)
- Kenny, D. A., Kashy, D. A., & Cook, W. L. (2006). *Dyadic data analysis*. New York: Guilford Press.
- Kenny, D. A., & La Voie, L. (1985). Separating individual and group effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 339–348.
- Leary, M. R. (2005). Sociometer theory and the pursuit of relational value: Getting to the root of self-esteem. *European Review of Social Psychology*, **16**, 75–111.
- Leary, M. R., & Baumeister, R. F. (2000). The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 32. San Diego, CA: Academic Press. pp. 1–62.
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 518–530.
- Ledermann, T., Bodenmann, G., Rudaz, M., & Bradbury, T. N. (2010). Stress, communication, and marital quality in couples. *Family Relations*, **59**, 195–206.
- Ledermann, T., & Kenny, D. A. (2012). The common fate model for dyadic data: Variations of a theoretically important but underutilized model. *Journal of Family Psychology*, **26**, 140–148.
- Lewin, K. (1947). Frontiers in group dynamics: Concept, method and reality in social science, social equilibria and social change. *Human Relations*, **1**, 5–41.
- Lüdtke, O., Marsh, H. W., Robitzsch, A., Trautwein, U., Asparouhov, T., & Muthén, B. (2008). The multilevel latent covariate model: A new, more reliable approach to group-level effects in contextual studies. *Psychological Methods*, **13**, 203–229.
- Marsh, H. W., Lüdtke, O., Robitzsch, A., Trautwein, U., Asparouhov, T., Muthén, B., & Nagengast, B. (2009). Doubly-latent models of school contextual effects: Integrating multilevel and structural equation approaches to control measurement and sampling error. *Multivariate Behavioral Research*, **44**, 764–802.
- Matthews, L. S., Conger, R. D., & Wickrama, K. A. S. (1996). Work-family conflict and marital quality: Mediating processes. *Social Psychology Quarterly*, **59**, 62–79.
- Mikulincer, M., & Shaver, P. R. (2003). The attachment behavioral system in adulthood: Activation, psychodynamics, and interpersonal processes. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 35. New York: Academic Press. pp. 53–152.
- Murray, S. L., & Holmes, J. G. (1997). A leap of faith? Positive illusions in romantic relationships. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **23**, 586–604.
- Murray, S. L., Rose, P., Holmes, J. G., Derrick, J., Podchaski, E. J., Bellavia, G., & Griffin, D. W. (2005). Putting the partner within reach: A dyadic perspective on felt security in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **88**, 327–347.
- Muthén, B. (1997). Latent variable modeling of longitudinal and multilevel data. *Sociological Methodology*, **27**, 453–480.
- Muthén, B. O. (1994). Multilevel covariance structure analysis. *Sociological Methods & Research*, **22**, 376–398.
- 大石 繁宏 (2009). 幸せを科学する——心理学からわかったこと—— 新曜社
- (Oishi, S.)
- Oishi, S. (2010). The psychology of residential mobility: Implications for the self, social relationships, and well-being. *Perspectives on Psychological Science*, **5**, 5–21.
- Oishi, S. (2014). Socioecological psychology. *Annual Review of Psychology*, **65**, 581–609.
- Oishi, S., Kesebir, S., & Snyder, B. H. (2009). Sociology: A lost connection in social psychology. *Personality and Social Psychology Review*, **13**, 334–353.
- 岡本 卓也・藤原 武弘・野波 寛・加藤 潤三 (2008). 共有集団イメージ法を用いた集団間関係の解析の試み 実験社会心理学研究, **48**, 1–16.
- (Okamoto, T., Fujihara, T., Nonami, H., & Kato, J. (2008). Measurement of intergroup relations using the shared group image method. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **48**, 1–16.)
- Preacher, K. J., Zyphur, M. J., & Zhang, Z. (2010). A general multilevel SEM framework for assessing multilevel mediation. *Psychological Methods*, **15**, 209–233.
- Putnam, R. D. (2000). *Bowling alone: The collapse and revival of American community*. New York: Simon & Schuster.
- (パットナム, R. D. 柴内 康文 (訳) (2006). 孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生—— 柏書房)
- Raudenbush, S. W., & Bryk, A. S. (2002). *Hierarchical linear models: Applications and data analysis methods*. 2nd ed. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Rholes, W. S., Simpson, J. A., Kohn, J. L., Wilson, C. L., Martin III, A. M., Tran, S., & Kashy, D. A. (2011). Attachment orientations and depression: A longitudinal study of new parents. *Journal of Personality and Social Psychology*, **100**, 567–586.

- Rosenquist, J. N., Fowler, J. H., & Christakis, N. A. (2011). Social network determinants of depression. *Molecular Psychiatry*, **16**, 273–281.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2001). On happiness and human potentials: A review of research on hedonic and eudaimonic well-being. *Annual Review of Psychology*, **52**, 141–166.
- Sampson, R. J., Morenoff, J. D., & Earls, F. (1999). Beyond social capital: Spatial dynamics of collective efficacy for children. *American Sociological Review*, **64**, 633–660.
- Sampson, R. J., Morenoff, J. D., & Gannon-Rowley, T. (2002). Assessing “neighborhood effects”: Social processes and new directions in research. *Annual Review of Sociology*, **28**, 443–478.
- Sampson, R. J., Raudenbush, S. W., & Earls, F. (1997). Neighborhoods and violent crime: A multilevel study of collective efficacy. *Science*, **277**, 918–924.
- 清水 裕士 (2014). 個人と集団のマルチレベル分析 ナカニシヤ出版 (Shimizu, H.)
- 清水 裕士・大坊 郁夫 (2007). 恋愛関係の相互作用構造と関係安定性の関連——カップルデータへのペアワイズ相関分析の適用—— 社会心理学研究, **22**, 295–304.
- (Shimizu, H., & Daibo, I. (2007). Clarifying the association between structure of interaction and stability of romantic relationships: Application of pairwise correlation analysis into dyad data. *Japanese Journal of Social Psychology*, **22**, 295–304.)
- 清水 裕士・大坊 郁夫 (2008). 恋愛関係における相互作用構造の研究——階層的データ解析による間主観性の分析—— 心理学研究, **78**, 575–582.
- (Shimizu, H., & Daibo, I. (2008). The structure of interaction in romantic relationships: Hierarchical data analysis of inter-subjectivity between partners. *Japanese Journal of Psychology*, **78**, 575–582.)
- Simmel, G. (1908). *Soziologie: Untersuchungen über die formen der vergesellschaftung*. Berlin: Duncker & Humblot.
- (ジンメル, G. 堀 喜望・居安 正 (訳) (1972). 集団の社会学 ミネルヴァ書房)
- Simpson, J. A., & Rholes, W. S. (2004). Anxious attachment and depressive symptoms: An interpersonal perspective. In W. S. Rholes & J. A. Simpson (Eds.), *Adult attachment: Theory, research, and clinical implications*. New York: Guilford Press. pp. 408–437.
- (シンプソン, J. A.・ロールズ, W. S. 金政 祐司 (訳) (2008). 不安のアタッチメントと抑うつ症状——対人関係の展望—— W. S. ロールズ・J. A. シンプソン (編著) 遠藤 利彦・谷口 弘一・金政 祐司・串崎 真志 (監訳) 成人のアタッチメント——理論・研究・臨床—— 北大路書房 pp. 367–394.)
- Simpson, J. A., Rholes, W. S., Campbell, L., Tran, S., & Wilson, C. L. (2003). Adult attachment, the transition to parenthood, and depressive symptoms. *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 1172–1187.
- 相馬 敏彦・山内 隆久・浦 光博 (2003). 恋愛・結婚関係における排他性とそのパートナーとの葛藤時の対処行動選択に与える影響 実験社会心理学研究, **43**, 75–84.
- (Souma, T., Yamauchi, T., & Ura, M. (2003). Selections of coping behavior to interpersonal conflict with a romantic partner as a function of exclusivity in the romantic relationships. *Japanese Journal of Social Psychology*, **43**, 75–84.)
- Sowislo, J. F., & Orth, U. (2013). Does low self-esteem predict depression and anxiety? A meta-analysis of longitudinal studies. *Psychological Bulletin*, **139**, 213–240.
- Stajkovic, A. D., Lee, D., & Nyberg, A. J. (2009). Collective efficacy, group potency, and group performance: Meta-analyses of their relationships, and test of a mediation model. *Journal of Applied Psychology*, **94**, 814–828.
- 豊田 秀樹 (2000). 共分散構造分析 “応用編” ——構造方程式モデリング—— 朝倉書店 (Toyoda, H.)
- 豊田 秀樹 (編著) (2009). 共分散構造分析 “実践編” ——構造方程式モデリング—— 朝倉書店 (Toyoda, H.)
- 浦 光博 (1992). 支えあう人と人——ソーシャル・サポートの社会心理学—— サイエンス社 (Ura, M.)
- 浦 光博 (2009). 排斥と受容の行動科学——社会と心がつくり出す孤立—— サイエンス社 (Ura, M.)
- Van Lange, P. A. M. (2013). What we should expect from theories in social psychology: Truth, Abstraction, Progress, and Applicability as Standards (TAPAS). *Personality and Social Psychology Review*, **17**, 40–55.
- Wolff, K. H. (1950). *The sociology of Georg Simmel*. Glencoe, IL: Free Press.
- Yamagishi, T., Hashimoto, H., Li, Y., & Schug, J. (2012). Stadtluft macht frei (City air brings freedom). *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **43**, 38–45.
- Zaccaro, S., Blair, V., Peterson, C., & Znanis, M. (1995). Collective efficacy. In J. E. Maddux (Ed.), *Self-efficacy, adaptation, and adjustment: Theory, research, and application*. New York: Plenum. pp. 305–330.

—— 2014. 7. 22 受稿, 2015. 5. 16 受理 ——